の呪符木簡。上端部は欠損しているが、意図的な切断とは考えがたい。欠損部、判読不能な文字が多く、記載内容全体は不明である。

⑿は上端部を尖らせた呪符木簡。墨は全く残っていないが、わずかに文字の痕跡が確認可能である。

なお、今回紹介する木簡は、いずれも高級アルコール法によって保存処理済みである。

釈読にあたっては㈶香川県置県百年記念財団・香川県歴史博物館の渋谷啓一・御厨義道両氏のご教示を得た。

9 関係文献

香川県教育委員会ほか『浜ノ町遺跡』（サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告六、二〇〇三年）

（乗松真也）

徳島・新蔵町三丁目遺跡

1 所在地　徳島市新蔵町三丁目

2 調査期間　第二次調査　一九九五年（平7）七月～一二月

3 発掘機関　㈶徳島県埋蔵文化財センター

4 調査担当者　近藤　理・横田温夫・湯浅文則

5 遺跡の種類　城下町跡

6 遺跡の年代　江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

新蔵町三丁目遺跡は徳島城下町遺跡の一つで、吉野川を中心とする河川によって形成された沖積地上に立地する。徳島城下町は、天正一三年（一五八五）の蜂須賀家政の阿波入国以後に築かれた徳島城の周辺に配置された。街区は、徳島・福島・寺島・常三島・住吉島・出来島の六つの島と、新町・富田・助任前川・佐古の各地区からなる。新蔵町三丁目遺跡は「徳島」に

（徳　島）

位置し、江戸期の「御山下絵図」などの絵図と、各家の石高の記録である「徳島藩士譜」などとの照合により、上級家臣の居宅が並んでいたことがわかる。遺跡の周辺は、現在では公共施設の集中する官庁街となっている。

近年、徳島城下町遺跡では多くの調査成果が蓄積されてきた。新蔵町三丁目遺跡の調査は徳島保健所の改築に伴うもので、三次にわたって発掘調査を実施した。

木簡は第二次調査において、溝SD二二一〇から一点出土した。この調査では三時期の遺構面が検出されており、SD二二一〇は第二遺構面の調査区東端において検出された南北方向の溝である。最大幅一m深さ〇・五mで、出土遺物には、磁器・陶器・土師質土器・瓦・土製品・漆器・木製品・銅製品・動物遺存体などがあり、量も多く内容も多岐にわたっている。遺構の性格としては、元禄期・安政期の絵図にみられる屋敷境の施設に相当する可能性が指摘されている。

8　木簡の釈文・内容

(1)　・「＜野川源太郎分　」

　　・「＜□□斗入　新宮」　　173×31×4　033

下端を剣先状に尖らせ、上端付近の左右には三角形の切り込みを入れる。墨書は表裏両面になされているが、ともに墨痕は明瞭ではない。「斗入」については、中前川町二丁目遺跡出土の木簡（本誌第二三号）に記載された「升取五人与」「升入五人与」が年貢米徴収時の計量責任者と考えられており参考になろう。

阿波においては、武家の所領支配として地方知行制が幕末期においても機能していたことが、出土木簡の事例により明らかにされつつある。この事例においても計量者を明記した背景には、その忠実な施行をうかがうことができよう。

9　関係文献

徳島県埋蔵文化財センター『新蔵町三丁目遺跡　徳島保健所地点—徳島保健所改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（徳島県埋蔵文化財センター調査報告書三一、二〇〇〇年）

（藤川智之）